

牛島盛光写真資料のこと

恩納村史「民俗編」専門委員

及川高(熊本大学文学部)



写真1 女性の写真。手の甲にハダチが入っている。円状の変色はフィルムの変質によるもの。

村史を作るためには多くの資料が必要になります。とりわけ、昔の暮らしや年中行事、風俗習慣などを扱う「民俗編」では、地域のかつての様子が分かる資料を幅広く集めることになります。この資料集めはおおむね現地での聞き取りで行いますので、これを読んでいる中にも協力いただいた方がいるかもしれません。ここではそうした現地調査とは別の、民俗に関する資料収集のあり方について紹介したいと思います。

ここにあげた写真1、2はいずれも1966年頃に恩納村で撮影されたものです。写真1は高齢の女性を写したのですが、指や手の甲にハダチが入っている様子が見とれます。残念ながらこの方が

どなたなのかは調べられていないのですが、おそらく親族の方が恩納村にいらっしゃるのではないかと思います。同じく写真2は現在の恩納共同売店のあたりを写したもののようです。奥に写っている建物は今でもありますので、60年近く昔の光景と言われると不思議な気持ちになるかもしれません。

これらの写真の撮影者は、民俗学者の牛島盛光さん(1921-2004)という方で、既に故人です。彼は熊本商科大学(当時)の教授で、主に熊本県の民俗に関して多くの仕事を残していますが、沖縄についても『比較民俗学論考―南九州・沖縄の社会と習俗―』(青潮社、1971年)という本で恩納村を扱っています。写真は恐らくこの本を書くための調査で撮影したものでしょう。復帰前の様子が分かる貴重な資料ですから、制作進行中の村史にも載せたいと考えていますが、実はこの写真が見つかったのはたまたまでした。

里帰りの写真資料

地域史や郷土史の研究者は自分の研究のため、沢山の資料を手元に集めています。写真もそうですし、聞き取り調査のノートやインタビューの録音、ビデオテープなどということもあります。本人はそうした資料をいつか本や論文にまとめようと考えているのですが、実際は集めるだけで整理しきれないこともよくあります。まして人生は有限ですので、本人の逝去で未発表のまま二度と目の見えない、ということも珍しくありません。最近「終活」という言葉もあります。もし自分が力尽きたらその時はこの資料はどうなってしまうのか、と考えるのは研究者にとってなかなか憂鬱なことでした。

牛島さんの写真も、遺品の中から発掘されたものでした。彼は写真のフィルムをスライドにし、大きなフォルダに入れて整理していました。大学の先生でしたので、授業か研究発表で使っていたのかもしれませんが、これを遺品から発見したのは、蔵書の整理を任せられ